



# 短編小説「禁煙」



3分で読める短編小説

宇野健吾  
unokengo

「タバコを止めたら、セックスのあとはナニをすればいいのだろう」  
いつだったか、日本に来日した大物女優のインタビューコメントを拝借して、僕はタバコを吸い続ける理由にしていた。

そんな僕がタバコを止めた。  
理由なんて特にない。  
ある日突然、タバコをやめようと思った。

「禁煙なんて簡単なものさ。だって僕は何度も禁煙したことがある」  
今までも何度か禁煙をし、そのたびに僕はこう言っていた。

「ねえ。。どうしてタバコ止めようと思ったの？」  
「別に理由なんてないよ。なんとなくね」

そろそろ2年の付き合いになる彼女とタバコを止めてから初めて会った。  
彼女はタバコは吸わない。  
でも僕がタバコを吸うことに対して意見をされたこともなかった。

「ふう〜ん。。もしかして新しい彼女でも出来たのかな。。って思ったよ」  
「ホントにそう思った？」  
思うわけないことには僕は気づいている。

「思ったと思う？」  
と彼女は聞くが、彼女自身も思っていないことには気づいている。

「思わない」  
「。。当たり前」

言葉などなくても2人の気持ちは通じ合い、それも2人はこうして会話している。  
2人きりの時間はのんびり流れ、日々の喧騒を忘れさせてくれる。  
会えばいつも、僕はベッドの中でタバコを吸った。

タバコをやめてから喉が渇くようになり、舌の感覚が敏感になった。  
食べ物の味だけでなく、食感をも鋭くなったように感じる。  
目の前に出される料理の温度変化による味の変化までもが僕を楽しませてくれる。

「タバコを止めたら、セックスのあとはキスをしながら眠ろう」  
食事をしながら、僕はこんなことを考えていた。

ベッドの中でキスをし、彼女のくちびるの柔らかさと温度と味を感じながら眠りかけたその時。

「ねえ。。」彼女が呟いた。

「もっかいしょ」